

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

全国規模での高校山岳部の実態調査 3(承前)

山行については、1ヶ月に1回から2回が平均的(ア生5)であり、年間で平均35.8日(ア生6)という結果が現れた。高校では2ヶ月に1回程度は定期テストがあり、その期間を含む2週間程度はクラブ活動の禁止または自粛が一般的である。そう考えるとほぼ1ヶ月に1回というのはかなりの頻度で入山していると言えよう。そんな中で、毎週山行をおこなっている学校が2割近いというのは、驚くべき割合である。私自身も月に1回の山行を基本に据えて活動を行っているが、毎月1回の山行の実施は、準備・計画・実行・反省のサイクルの中で、常時生徒が顔を合わせている状態を生みだし、部活動の活性化の必須条件ともなっている。

ここ数年、人工壁でのクライミングも都市部を中心に普及し、2010年度からは高体連が主催する全国選抜クライミング選手権大会も開催されるようになり、今年度5回目を迎えた。クライミングについては、調査した結果だけを見ると、取り組んでいる生徒の平均クライミング日数は1ヶ月に7.6日(ア生7)であった。しかし、今回回答してくれた学校の中で、選抜クライミング大会へ参加している学校は少ない。都市部の高校を中心に、いわゆる登山は行わずクライミングのみの活動をしている学校も少なからずある。また、選抜大会に参加している生徒の中にはクライミングジムなどで活動をし、学校の山岳部の活動という範疇には収まらない生徒の多いことも現実である。山岳部の活動の一環としてクライミングは極めて有効な活動であるが、取り組みには、大きな差があるということである。クライミングの練習場所・クライミングジム等の施設環境に個人的な要素が加わり、取り組みには地域による差、個人による差が生じている。このことについては、別に論ずることが必要である。

生徒たちが山岳部に入部してよかったと感じていること(ア生14)の中では、「自然の素晴らしさに触れた」「楽しさがわかった」「達成感がある」などが3割を占め、「体力がついた」(22%)「共同生活を通して仲間との絆ができた」(21%)と合わせると7割を超える。その他には「精神面が鍛えられた」「生活力が身についた」「不便さの中で日常の素晴らしさを感じることができた」などという回答もそれぞれ5%程度ある。

ア生15では、山岳部の活動をしていく上で困っていることを尋ねたが、この質問への回答の筆頭は、「金銭面での負担が大きいこと」(24%)であった。親がかりの高校生たちが、道具を揃えるところから始まり、実際の山行での交通費や食費などかなり苦労している様子がうかがわれる。次いで「体力面や健康面での不安」(11%)「部員数が少ない」(10%)「勉強との両立が難しい」(10%)などが続く。まじめに部活動に取り組もうと考えている高校生の率直な悩みであろう。「女子部員が少ない」(5%)「風呂に入れない」(5%)「認知度が低い」(4%)といった回答も若者らしい。経済的な面の困難性は、指導者も口を揃えているところであり、高校生が山岳部活動を続けていくうえでは、高いハードルとなっている。

入部する前と入った後のイメージのギャップ(ア生16)としては「競技があるとは知

らなかった」という回答や「大会で覚えたりすることが多い」「天気図などの審査がある」などが35%を占め、高校総体を始めとする競技登山に対する違和感の大きさが浮き彫りになっている。さらに、活動については「思った以上にきつい」という回答も30%を超えている。もともと、登山は他人と競うものではないものであり、そのイメージを持って入部するというのは当たり前姿だろう。だから、先の入部動機の中に大会や競技登山に言及したものはほとんどなく、それとは対極にある中学でのハードな運動部体験からの逃避的な部分や、家族との楽しい登山の思い出をきっかけとしたもの、友人との楽しい高校生活への期待などが挙がっているのである。それが、生徒の目には「大会への違和感」、「想像以上に厳しい世界」と映っているのであろう。しかし、だからと言って、彼らの殆どが登山を嫌いになっているわけではなく、むしろ登山を好きになっていることは注目に値する。彼らは、自分の描くクラブ活動とはイメージの異なる世界においても、ある意味競技は競技として割り切り、苦勞を共にし、共同生活をする中で、目的を見出しているのである。それは登山が本質的に持つ魅力のなせる業といえるのではないだろうか。どのような形にせよ、山の素晴らしさを知った生徒たちを将来の登山界へと繋ぐべく、大事にしていきたいものである。

5、おわりに

将来の登山の目標（ア生17）について、卒業後は山はやらないと明言している生徒も僅かにいるが、ほとんどの生徒が山に関する目標を記述し、高校卒業後も自分なりの山を追求したいと考えていることがうかがわれる。

具体的に登りたい山を挙げた記述が254例あり、35例が富士山（35%）、69例が日本アルプス（27%）、24例が百名山（9%）などと答えているのはある意味予想されるところでもあるが、55例が海外登山（22%）と答えているのも興味深い。これに関しては学年進行（登山経験）による有意差を調べてみたが、あまり認められなかった。社会人と違い、基本的に居住地の山を活動拠点としており、登れる山が限定されている高校生ゆえ、海外は別として、富士山や日本アルプスなどの国内の高峰と知名度の高い山が目標となるのは無理からぬところである。

登山形態に言及した回答としては、クライミングを続けたいという生徒が45名と目立つ（このうちの多くが自然岩場と考えられる）ほか、雪山に行きたいという回答が26名あり、山スキーやアイスクライミングなどの冬季の活動や沢登りなどのバリエーションを志向する回答もあった。山小屋で仕事をしてみたい、山岳救助隊員になりたい、山の診療所で働きたいという将来と結びつけた回答にも興味を惹かれた。

ともあれ、高校山岳部の活動期間は長い人生においては凝縮した短い期間である。しかも、その時期は極めて多感な時期であり、生涯の友との出会いもあれば、進路を決める大事な一段階でもある。その時期に山岳という素晴らしい世界に足を踏み込んだ生徒たちとともに夢を語ることは何と素敵なことだろう。先にも述べたが、少子化が進行し、学校統合やクラブ活動全体の見直しも行われている中で、10年ほど前に比べ、印象とはいえ、指導者が感じている山岳部回帰の流れを絶やさないためには、ある意味今が正念場かもしれない。そのためにこのアンケートが少しでも役立てるのであれば望外の喜びである。